

教員の異動が生活や心身の健康に与える影響

— 面接調査による質的検討 —

○尾崎 杏奈・山本 力

(就実大学大学院教育学研究科)

1. 問題と目的

文部科学省によると平成 27 年度、教員の精神疾患による休職者は 5,009 名と高止まりし、新たな施策が急がれている。國本・松尾(2016)は教員の異動はメンタルヘルス不調に陥りやすいと示した一方、さらなる詳細な研究が必要であると述べている。本研究では、教員が異動に伴い自身の生活や心身にどのような影響や要因があるのかを検討するために、面接調査を実施。これまで着目されなかった“異動前”の希望や期待に焦点を当て、異動後の状況との関連を質的に検討した。

2. 方法

調査対象：調査者のネットワークを利用して A 県内の各学校種の教員 10 名から承諾を得て実施。

調査期間：2017 年 6 月～2017 年 8 月。50 分/人。

調査手続き：事前調査アンケートを用いて、性別、年齢、教職経験年数等を確認。調査面接では「異動希望届け提出前後」「内示を受けた後」「着任後」と時系列に沿って異動体験を聴取した。

分析方法：グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いてカテゴリー生成を行った。

3. 結果

カテゴリーに基づいたストーリーラインを記載する。またカテゴリー関連図を図 1 に示す。

(1)「異動希望届け提出前後」：長年勤めて仕事がやりやすく、居心地の良い職場を理由に留任を望んだ教員と、一方で何年もいると馴れ合いになる

からと異動を希望した教員とで別れた。他にも職場への怒りから異動希望した教員、気分を一新させたい、教員として成長したいという思いで異動希望した教員もいた。

(2)「内示を受けた後」：希望通りで納得できた教員と、予想外の異動で納得いかないままの教員と別れた。両方とも異動先に適応しやすくするために、異動に向けて準備をしたり、どうにかなるだろうと割り切って準備を行った。

(3)「着任後」：難しいクラスを任され孤軍奮闘しながらの学級経営や、雰囲気を悪くする同僚の存在から、適応不全でダウンした教員がいた。しかし同僚・管理職の助けがあった教員は適応することができた。他にも前任校とのギャップから、慣れるまで思うようにできないと諦める一方、勉強不足と感じ学び直しが必要と感じた教員もいた。

4. 考察

(1) 留任希望にもかかわらず異動させられた教員は、着任後に半数が適応不全でダウンした。しかしダウンせずに再適応できた教員は、同僚や管理職のサポートがあったことが示唆された。

(2) 納得しないまま異動すると、不満や怒りから異動後のモチベーションに負の影響を与え、異動後に不調を引き起こしやすくなる。従来の異動に関する研究では、着任後の不調に注意が向きがちであったが、想定外の異動では「内示」から不調の前兆が生起している可能性が見出された。

